

北海道産のいわゆるツヤナシトドマツカミキリと その近似種について —1 新種の記載—

平山 洋人

A new species of the genus *Tetropium* Kirby (Coleoptera, Cerambycidae) from Hokkaido, Japan,
previously confused with *T. gracilicorne* Reitter
by Hiroto Hirayama*

ツヤナシトドマツカミキリ。この和名が初めて世に出たのは、草間・高桑 (1984)¹⁾ においてで、*Tetropium fuscum* (Fabricius) —ヨーロッパ原産— の学名のものであった。用いられた標本は、北海道十勝支庁幌加産、27-30. VII. 1967, 高桑正敏氏採集の1♂ (以下、「高桑標本」: 図1) のみで、図鑑本文中の日本語記述 (一部) には、「前胸背は側部が鮫肌状、中央は不規則に細かに点刻され、1対の隆起部はしわ状、あまり直立しない細毛でおおわれ、前2種 (= トドマツカミキリ, カラマツカミキリ; 筆者註) よりも明らかに光沢が弱い」とある。これが「ツヤナシ」とされた和名の所以な訳だが、その後を得られた同種と思われる標本中にこれと同様の特徴の前胸背を持つものは見られず、その正体は漠然としたままで、新里 (1992)²⁾ でも、草間・高桑 (1984)¹⁾ の扱いが踏襲されている。その後、新里 (2001)³⁾ は、「高桑標本」を含む複数の北海道産標本の検討からこの種をアムールから記載された *T. gracilicorne* Reitter であるとし、以後の新里 (2007)⁴⁾、新里ほか (2012)⁵⁾ とこの扱いは続けられ、今日に至っている。

十勝支庁上士幌町幌加は、かつて帯広から十勝三股まで伸びていた旧国鉄士幌線の終点一つ手前の駅で、終点十勝三股とともに駅前および周辺には広大な土場があり、針葉樹を中心とした積材から多くの珍品カミキリが採集されたカミキリ屋のメッカであった。筆者が初めて十勝三股付近を訪れた1989年には林業の衰退に伴い既に士幌線は廃線となっていて、「駅前土場」は過去のものとなっていたが、それでも周辺の林道を車で回ればまだ幾ばくかの土場や立ち枯れが見られ、良いポイントでは量はともかく質的には一通りのカミキリが採集できた、いわば良き時代の最後の一幕ともいべき時期であった。

7月下旬、十勝三股から勝北峠を経て置戸町に抜ける置戸越え林道 (この林道は単に置戸林道と呼ばれたり、ま



図1. ツヤナシトドマツカミキリ初記録標本「高桑標本」(スケール: 5mm) — a: 全形; b: 前胸背板拡大

た勝北峠より置戸町側の一部は正確には常呂本流林道というらしいが、本報文では基本的には全線を便宜上この名称で示すこととする) を上士幌町側から数km入った辺りでアカエゾマツを主とする伐材が積まれた土場に遭遇した。この土場は広場の縁に切り残された1本の太くて真新しいアカエゾマツ立ち枯れを支えとして2階くらいの高さまで材が積まれ、材にはカタキカタビロハナカミキリの♀やキタクニハナカミキリが飛来し、ヒゲナガカミキリ類やヒゲナガモモフトカミキリ類が這い回り、支えの立ち枯れにはこれを発生源とするアオヒメスギカミキリがせわしなく駆けずり、さらに材山の最上部まで登って繋ぎ竿を伸ばすと、立ち枯れの高い枝先を群飛するばかりのカタキカタビロハナの♂も射程内に入れることができるという絶好のロケーションであった。

喜び勇んで採集するうち、立ち枯れから何か不思議な感じのする *Tetropium* を採集した。一緒にただのトドマツカミキリ *T. castaneum* も這っているのだが、それらとは一

*) Author's address: Midori-chō 2-33-5-309, Fuchū-shi, Tokyo, 183-0006 Japan.

見して異質のものであることは、すぐに気がついた。この立ち枯れからは同行していた仙台の佐藤敦氏と3日間て計4♂2♀を得たが、1984年の「日本産カミキリ大図鑑」の製作で高桑氏のお手伝いをさせていただいて「高桑標本」も実物を見ていた筆者には、これらがツヤナシトドマツであろうという考えに至るのにさほどの時間は要しなかった。

……が、しかしである。帰京後、これらの標本を作製して図鑑の記述を詳しく読むと、全体のフォームや色彩は大筋同じなのだが、前胸背の形状だけは述べられている特徴と異なり、どれもより単純で平滑なものであった。いまひとつ納得がいかないものはあるが、この時点で見ている標本は「高桑標本」も含めて7頭のみだし、まあ、単なる個体変異の範疇のことなのだろうという思いのままでいた。

翌年も佐藤氏とともに、同じような日程で夏の北海道を回ったが、前年の置戸越え林道のポイントでは材は搬出されてまったくなく、件の立ち枯れは防虫のため完全に樹皮が剥がれて白骨状の無残な姿をさらしており、他の場所にできた小さな土場でカタキカタビロハナ♀やキタクニハナを少々採ったくらいで、この林道であまりいい思いをした記憶はない。その代わりという訳ではないが、十勝三股17の沢で見つけた1本のアカエゾマツ衰弱木からまだ7月20日代というのに、ホソトドマツカミキリ *T. gracilicium* を二人で2♂1♀+樹脂にまかれた死骸1♂を得ている。樹脂にまかれた死骸や♀成虫がいるということは、既にこの時期、発生のはしりではないと思われるのだが、現実にこの種の採集データを集積してみると8月に入ってから、それも後半のものが多く、場合によっては9月半ばまで及んでいるが、このときのもの以外に7月の採集例を筆者は知らない。このようなデータが得られたことは収穫ではあったが、しかしこの年、ツヤナシトドマツが我々の前に姿を現すことはなかった。

時は過ぎ、1995年になる。この年の夏は少々仕事をサボり倒して、早めに（といっても1週間ほどだが）単身で北海道へ渡った。

後から振り返ってみると、この年はこれまでのカミキリ屋人生で一番のカミキリの豊作年で、北海道へ入る前後も中部地方の山岳地域では行く先々ごとに大漁節だったし、筆者が北海道へ行っている間も木曾御嶽山ではスミイロハナカミキリなどの当たり年で、ベテランで腕達者のT氏やA氏はそれぞれ2桁のスミイロハナやカラフトホソコバネカミキリを採るなどしていたようだ。筆者も道内各地を転戦する先々で、北海道では初めて手にする種や、それまであまり採っていなかった種のツボに当たり、タトウは見る見るうちに埋まっていった。ただし、十勝三股

周辺をしつこく探索するも、ツヤナシトドマツだけは何故か我が手には落ちずじまいだったのだが（後記するデータをご覧いただければ分かるように、実はこの年はツヤナシトドマツも比較的当たり年だったのである）。

そんな道中での7月28日、この日は石北本線生田原駅の裏に広がる有名な貯木場で採集していた。広葉樹からはヤナギトラカミキリ、ヤマナラシノモモブトカミキリ、フタオタマムシなどが、針葉樹からはムネツヤサビカミキリや、ただのトドマツカミキリだけれども様々なタイプが多数得られた。貯木場の周辺の立木のスイーピングではエゾアメイロカミキリやニセヤツボシカミキリ、キンヘリタマムシなどが入った。

そういった採集を続けていい加減時間も経って辺りもそろそろ薄暗くなりかけた頃、ある針葉樹材の山の一番縁にあった真新しい1本のアカエゾマツ材に行き当たる。表面に刺激を与えると、妙な *Tetropium* が次から次へと湧き出してきた。何だか他の材で得た奴らより皆小さく黒っぽいのだが、夕闇の中でははっきりと確認できない。翌日はアイヌホソコバネカミキリなどで知られる朱鞠内湖方面へ行くつもりだったので、夜のうちに百六、七十kmを移動しなければならない。いくら北海道の夜の道が高速道路並みだとしても、食事時間も確保しなければならないし、早朝から採集を始めるにせよ最低限の仮眠時間は欲しい。とにかく出てきたカミキリを片っぱしから殺虫管に放り込んで、車を発進させた。

長期の採集行で特に夜間移動の場合、筆者は基本的には翌朝、その日の採集を始める前に前日の“獲物”を殺虫管から出して（夜間、暗く狭い車内で殺虫管を開けると、何がしかの虫をこぼしてなくす恐れが高い）とりあえず場所別にまとめてチャック袋に密封し、丸一日後以降、死後硬直が解けるのを待って、紙のタトウに最低線の展脚をするという流れを行っている。

明けて29日の朱鞠内湖周辺はいま一つ天候が芳しくなく丸一日、中途半端に時間を使ってしまい、それまでの疲労の蓄積もあってこの日の明るい時間は展脚の余裕がなかった。そのため、28日の採集品をしげしげと眺めるのは30日の朝となる。並べてみて改めて判ったのは、最後の材から採った集団だけはやはりただのトドマツではなく、十勝のツヤナシトドマツに一見似ているが、それよりも明らかに小型で寸詰まりで色が濃いということだった。どうやら何か妙なものを採ったらしいという感を抱きつつ採集を続けていたが、この日も天候は優れず気温もあまり上がらず、アイヌホソコバネも労する時間の割には数が採れない。さらにカーラジオで天気予報を聞くと、翌日は遂に雨になるという。本来、昼間の時間を移動に使うのはもったいないのだが、どうせ雨ならここにいでもろくにできることはないし、ならばどうしても気

になる生田原のあの材をもう一度やりたい。ターゲットの材は1本だけだし、たとえ雨天で低温でも材の樹皮下に潜む虫ならある程度は何とかなるだろう。という訳で予定を変更、翌31日は、1本の材を見るためだけに生田原までの往復三百数十km以上を走破することにした。

考えてみれば、これは非常にリスクのある賭けだった。あの材は、既に材山の一番縁にあった。貯木場の材は端から順にフォークリフトで、製材するかあるいはチップにするために併設する工場に運ばれてしまう。果たして、あの材はまだ残されているだろうか。生田原へ向けて雨の道を走りながらこのことに気づき、だんだん不安になってきたのだが、いざ着いてみると現地はこの3日間、朱鞠内方面以上に天気が悪くずっと雨だったようで、その間、貯木場の作業は中断しており、件の材はまさに隣の山まで来たフォークリフトがそこで止められたまま放置されていて、奇跡的にまだ3日前の状態のままだった。かなり強い雨の中、傘を片手に材を調べると、「妙な奴」を4♂追加することができた。とりあえずの成果を得て、再び朱鞠内に戻ると、翌日は天気も回復し、地元北海道のベテランカミキリ屋さんにもお会いした。「妙な *Tetropium*」のことを話すと彼は、すぐさま行きたいというので、例の材の詳しい場所をお教えしたのだが……。後日お聞きしたところでは、その方が行った時にはやはりというか、その材は既に跡形もなく消え失せた後だったという。

帰路、札幌へ寄り、自らの成果を見せると同時に標本を抜くため？、地元の石田浩司氏宅へお邪魔する。既に十勝三股周辺のツヤナシドマツを幾つか採っていた石田氏だが、筆者の生田原のタトウに並んだ妙な *Tetropium* を一目見るなり、彼も「これ、違うじゃない！」という。あらかじめ用意してきたお土産虫に加え、やむを得ないのでこれも1頭お渡しし、その代りそれに見合う以上？の北海道産カミキリをいただいて、23時半に苫小牧発のフェリーに乗るため辞する。

帰京後、以前採集した十勝産のツヤナシドマツに高桑氏からお借りした「高桑標本」、それに生田原のものも加えて交尾器も含めた細部を調べた結果、やはり「高桑標本」は十勝産ツヤナシドマツの極端な異常型に思えたが、生田原産の標本群はそれらとは変異の幅が重ならず別種と思われた。

ツヤナシドマツの類いに2種いる！ そう考えたものの、これの分類学的処理はそう簡単ではなかろうことも同時に頭に浮かんだ。琉球列島や小笠原のような島嶼、あるいは高山のような隔離された環境で発見された新顔はすぐに調べが付き、新種、新亜種の命名もし易いが、ことは北海道のカミキリである。

北海道には本州以南の国内には分布しないカミキリが

多数産し、それ故、採集家、コレクターの魅力の地となっているが、実は北海道特産種のカミキリというのはほとんどいない。国内では北海道以北にしか産しないおよそすべての種は大陸側の沿海州からサハリンにかけて同種がおり、亜種的な差異があるとしてもその差は微々たる場合が多い。現行の分類で北海道特産種とされるのはエゾシロオビドイカミキリ *Mimectatina longipennis* のみだが、これとて本州のシロオビドイカミキリ *M. fuscoplagiata* との亜種関係の範疇とみなせないこともないし、寒冷地針葉樹喰いのこのグループが大陸側にいてもおかしくないだろう（筆者は詳しく調べていないが）。

Takakuwa & Oda (1978) は北海道を基準産地としてヤナギトラカミキリ *Xylotrechus salicis* を新種記載したが、勿論十分調べられたうえでのことだろうが、実はこれは稀有な例であって、北海道でこのような大型種が発見されても大抵は大陸から既に記載されている「未記録種」止まりである。ヤナギトラも事実、その後大陸でも発見されている。いずれにしてもこれは慎重な取り扱いを要すると思われ、いままし資料を集めようと考えた。

カラマツカミキリ *T. morishimaorum* の発見者である栃木県日光市の森島直哉氏は、草間・高桑 (1984)¹⁾ でこれが新種記載されたことに加え、ツヤナシドマツが発表されたことでこのグループに興味を持たれ、北海道産のこの類の標本をこつこつと収集しておられた。電話でお話を聞くと、どうもツヤナシドマツ類らしきものもいくつかお持ちのようなので、早速日光へお伺いする。

標本を拝見すると、十勝産のツヤナシドマツに加え、生田原タイプのものも幾つかあり、しかも生田原以外の産地のものもある。さらには1組だけが両種が同じ産地ラベルを付けられたものまで含まれている。非常に重要な標本群であることが判り、お願いしてまとめてお借りしてきた。

北海道産 *Tetropium* の不明種についてはもう一つ、注目すべき報告がある。芳賀 (1989)²⁾ は、宗谷支庁中頓別町上頓別にて1987年7月27日に採集した *Tetropium* sp. 1 ♀ について、「トマツ、ホソトマツ、ツヤナシドマツと明らかに異なる」種として報告している。この標本はその後、露木繁雄氏に委ねられ、さらに露木氏からお借りして現在筆者の手元にあり、結論としては生田原タイプのものである。芳賀氏が「……ツヤナシドマツと明らかに異なる」と述べているのはこの時点でツヤナシドマツに関する情報源は草間・高桑 (1984)¹⁾ しかなく、そこに書かれている記述は異常個体の形態に基づくものだから当然といえばそれまでののだが、現実にはツヤナシドマツのみならず、ただのトマツにもここで述べている2種と紛らわ

しい個体が生じる北海道産 *Tetropium* について、たった1♀の標本を、図鑑の記述を丁寧に読み、同属他種のいずれとも異なると断じているのは、やはり達見というべきである。

この少し後、高桑氏から、新里達也氏がツヤナシドマツの研究をしたいというので「高桑標本」を一度彼に渡してくれという連絡が入る。筆者もこれらの扱いをどうしたものか考えあぐねている最中であり、年齢的に仕事の方も多忙になりカミキリの研究に費やす時間も作りにくくなりつつあったので、快くこれに応じ、「高桑標本」は新里氏の手に移り、以後の彼によるツヤナシドマツ = *T. gracilicorne* Reitter であるという結論に至ることになる。

結果的に彼が北海道の方々から研究のために借り出した標本中にも、後でそれらを見ると2種が混在していたが、やはり他人の標本箱からバラバラに集めた状態も様々な標本では、彼をもってしても酷似する2種を見分けることはできなかったようである。例えば新里ほか (2012)⁵⁾, 33p. 写真8の生田原産♀ (31. VII. 1997, 石浜宣夫採集) は、明らかに筆者が生田原で得たのと同じもの (= ツヤナシドマツでない方の種) である。ちなみに同写真7に図示されている「高桑標本」の産地が35p. において何故か「北海道雨竜郡幌加内町 (旧幌加)」と記されている。「幌加内」という地名に惑わされたのかも知れないが (その割には写真7のキャプション自体は「十勝三股産一厳密にはこれも誤りである」とされているのだが)、「高桑標本」の正しい産地は大雪山塊の南東に位置する十勝支庁河東郡上士幌町幌加であり、北海道西北部に位置し前出の朱鞠内湖などを含む (旧空知支庁) 雨竜郡幌加内町とはまったく別の場所である。ことに後記の採集データを見ていただければお分かりのように、この幌加内町からはツヤナシドマツでない方の種が得られており、万一の混乱を避けるためにもこの点は明確に訂正しておきたい (ついでながら、同写真9のカラマツカミキリ♂のキャプションの産地名「群馬県日光市湯元も、「栃木県日光市湯元」の誤り)。

さて、2種いるとして、これらは果たしてどう処理したものだろうか。比較的近年の著述で極東アジア周辺のこの属についての解説が載っているものとしては、Cherepanov (1979)⁷⁾ がある。これに解説されている *Tetropium* 属は、*T. castaneum* (Linnaeus) (トドマツカミキリ)、*T. gracilicorne*、*T. fuscum*、*T. aquilonium* Plavilstshikov の4種である。

まず、北海道にも普通に産する *T. castaneum* は除くとして、最初にツヤナシドマツの学名とされた *T. fuscum* であるが、この解説にはこの種は上翅基部に白色微毛による横帯を有すると書かれており、挿図もそのように描かれている。筆者はかつて高桑氏に、図鑑製作に際しツヤナシドマツを *T. fuscum* とした根拠をお尋ねしたことがあ

る。そのときのお答えは、「ヨーロッパ人が *T. fuscum* と同定した標本と比較して……」というものだったが、その現物はお持ちではないようだった。もし借りたとすれば誰からだろう? まず一番身近に思いつくのは、図鑑の共著者の草間慶一博士である。そこで現在、草間コレクションを管理しておられる露木繁雄氏に、草間コレクション中にそれらしき標本がないか調べていただいたところ、現在はチェコ共和国に属するモラヴィア産の「*Tetropium fuscum* F.」と同定ラベル (個体単位で同定ラベルが付けられていたのはこれのみだった) の付けられた1頭の♂標本が出てきた (図2)。カビに覆われた状態の悪い古い標本であるが、検鏡するとカビ越しに上翅基部には白い微毛の密集が認められる。一方、前胸背を見ると「高桑標本」以上に密な点刻と横の隆条で占められ、極めて光沢に乏しい。あくまで推測であるが、高桑氏はこの前胸背の形状を根拠に、「高桑標本」を *T. fuscum* と同定したのではなかろうか。他方、上翅基部の白色部などにはやはり違和感も覚えられたのだろうか、草間・高桑 (1984)¹⁾ のツヤナシドマツの解説文の末尾は、「……ヨーロッパ産とは上翅の色彩や体型など多少とも異なり、あるいは別種かもしれない」という断定を避ける言い方で終わっている。ここでとり上げている2種の標本の中に、たとえ痕跡程度でも上翅基部に白色紋が生じているものは皆無である。やはり *T. fuscum* はまず候補から外れそだ。

残るは *T. gracilicorne*、*T. aquilonium* の2種であるが、これらの英語版をつぶさに訳してみるのだが、どちらも何となく合致しそうでもあるし、そうでもなさそうでもある。別に著者が悪い訳ではないのだが、やはり文章というものは何分にも主観的であり、例えば「〇褐色」といってもどの程度の濃さの色か現物を見ないことには正確にはイメージできないし、「全身に微毛を密生し」といわれ



図2. *Tetropium fuscum* ♂ (モラヴィア) (スケール: 5mm)



図3. *Tetropium gracilicorne* (スケール: 5mm) — a: ♂ (中央アジア・Tuva); b: ♀ (西シベリア)

でも具体的にどの程度の密度なのかは定量的にいられない限り解りかねる。モノクロながら綿密に描かれた挿図を見ると *T. gracilicorne* の図はたしかに生田原のものに非常に似ており、*T. aquilonium* も一見ツヤナシドマツの♀のようにも見える。ただし、*T. gracilicorne* は日本海対岸の極東ハバロフスクから記載され、大陸の広範囲に分布するが、*T. aquilonium* というのはオビ川下流域から、パレンツ海に流れ込むペチョラ川付近にかけての、極東とはシベリアを挟んでむしろ対角に位置する地域からしか知られていないようである。

そんな段階で停滞し、悶々としていたところに出版されたのが、Danilevsky, M. L. (2014) Longicorn beetles (Coleoptera, Cerambycidae) of Russia and adjacent counties. Part 1 (ロシアおよび近隣諸国のカミキリ図鑑1巻) である。はっきりいって、今までの図鑑とは桁が違う。本文がロシア語なので学名以外は難読なのだが、それでもおそらく大陸産では知られる限りの種類を網羅し、種ごとの変異を示す多数の標本が近年の高画質の画像で並べられている。*Tetropium* 属も9種がカラー図示されていて、1種を除き複数個体が掲載されている。やはり「百聞(文)は一見に如かず」である。即座に思ったのは、この図鑑でも *T. gracilicorne* が生田原タイプに形態的に非常に近く見えること(ただし、この図鑑に図示されている♂のような明るい色彩型は北海道からは未見であるが)、*T. gabrieli* Weise もそれに似ていること、*T. aquilonium* の実物はやはりツヤナシドマツとはまったくの別物であることである。一方、ツヤナシドマツにぴったり合致しそうなものは見当たらない。やはりこれは、記載するしかないと結論づけた。

しかし、事を進めるには細部を固めなければならない。

有難いことに、大林延夫博士にこれまでの状況をご相談すると、Danilevsky博士から関連する種の英語訳版を取り寄せていただいたうえで、同博士同定の *T. gracilicorne* および *T. gabrieli* の標本を借りてくださった。実際の大産標本と比較すると、やはり生田原タイプは大産 *T. gracilicorne* (図3) と形態的にはほぼ一致する。ただし、上翅の色彩については3♂3♀中、2♂2♀が前述のような北海道産には今のところ見られない明るい茶色(図3a)だが、*Tetropium* 属ではトドマツカミキリやカラマツカミキリでも上翅や肢の色彩変異は見られるので、これも産地の異なる個体群に生じた同様な多型現象とみなせるだろう。北海道産にも1♀のみだが上翅が淡褐色のもの(図5g)や、肢が明るい赤色となったもの(図5d, e, g, j, l)は見られた。一方、*T. gabrieli*の方はモラヴィア産4♂4♀を検したが、逆に色彩は安定しているもののすべての個体で前胸背中央の縦条が広く明瞭で、*T. gracilicorne* とはこの点で区別し得るものだった。ただ、この前胸背中央の縦条は、北海道産を含む *T. gracilicorne* にも変異幅はあるが多少なりとも見られ、新里(2001)³⁾も言及しているように両種はかなり近縁なものであろう。

以上を踏まえたうえで、以下に北海道産の2種の特徴について記述する。新種とするのはツヤナシドマツカミキリ=「高桑標本」と同種と考えられる方で「名は体を表わ」していないのだが、これまでの経緯を踏まえてこちらの和名はそのままとし、*T. gracilicorne* の方に新和名を提唱したい。

ツヤナシドマツカミキリ (図1, 4, 6)

Tetropium takakuwai Hirayama, 2018 (新種)

北海道産 *T. gracilicorne* に似るが、本種の方が一回り大きく、またやや細長い体型をしている(前胸背に対する上翅の長さは、♂で3.3倍、♀で3.4倍前後)。前胸背板はある程度の光沢があり、やや変異があるが側縁は中央か僅かに後方で最大幅となる。一般に正中部は点刻がなく光沢のある縦条となる場合が多く、周囲は細かくやや密に点刻される。小楯板は逆台形状でやや密に点刻され、光沢に乏しい。上翅は例外的な個体もあるが通常はあまり赤味のない褐色の地色に灰色の微毛が密生し、肉眼視ではやや灰緑色がかって見えるものが多い。肢は黒褐色だが稀に赤~暗赤色のものもある。

♂交尾器; 中央片の先端部は多少の変異もあるが、あまり鋭くはならず、丸味を帯びる。中央孔より先は短く、幅の2倍に達しない。側片は次種よりキチン質化が強く、特に各片葉下面基部の隆起<→部>は、次種に比べて強く隆起、着色される(図6-a~f, f=「高桑標本」)。

体長: ♂9.0~12.5mm (平均11.2mm/13頭), ♀9.8

～13.0mm (平均12.1mm/10頭)。

検視標本：十勝支庁上士幌町幌加：1♂, 27-30. VII. 1967, 高桑正敏採集；同 幌加3の沢：1♂, 26-28. VII. 1970, Y. Suzuki採集；同 十勝三股：1♀, 13. VII. 1981, K. Oidaira採集；1♂, 24. VII. 1981, 佐々木恵一採集；1♀, 19. VII. 1999, 平山洋人採集；同 置戸越え林道：4♂2♀, 25-27. VII. 1989, 佐藤敦・平山洋人採集；1♂, 16. VII. 1995, 石田浩司採集；2♂, 22. VII. 1995, 石田浩司採集；2♀, 6. VIII. 1995, 石田浩司採集；網走支庁置戸町置戸越え林道：1♂1♀, 29. VI. 1995, 田中伸一採集；3♀, 7. VIII. 1995, 菅原豊採集；1♂, 14. VIII. 1995, 菅原豊採集；上川支庁上川町三国峠：1♂, 23. VII. 1994, 秋田勝己採集, 1♂, 24. VII. 2000, 露木繁雄採集

分布：現在までに判明している分布域は、大雪山塊南東の十勝三股を中心に、南は上士幌町幌加、北は三国峠北側、東は上士幌町から置戸町に至る置戸越え林道一帯。

寄主植物：飼育・羽化脱出例はないが、主にアカエゾマツの衰弱木、新しい伐採木から得られるほか、石田浩司氏の1995年の採集例はいずれもトドマツ伐採木樹皮下から得られたという。

種小名は、最初に本種の存在を公表され、その後の研究の出発点を作られた故・高桑正敏博士に献名する。

ヒゲボソトドマツカミキリ (和名新称) (図5, 7)

Tetropium gracilicorne Reitter, 1889

前種に極めて似ており、特に前種の小型の個体とは識別が難しいが、以下の特徴を総合的に見ることで区別できる。前種に比べて一回り小さく、体型はより寸づまり気味である(前胸背に対する上翅の長さは、♂で3.2倍、♀で3.3倍前後)。前胸側縁は、多少変異があるが中央付近かそれよりやや前方で最大幅となり、そこから後端まで細まっていくため前種よりも前方からくびれ出す感がある。また、頭部正中部に縦条を持つ個体があるが、現在までに検した範囲では前種でこれを有する個体はなく、この縦条があれば本種ということはいえるかも知れない。小楯板はやや密に点刻され、前種同様光沢は強くない。上翅はやや赤味の強い褐色で微毛は前種に比べて特に中央部で粗く、このため赤味を帯びたこげ茶色に見える。肢は前種よりやや明るい褐色のものが多く、ときに暗赤色型もみられる。

♂交尾器：中央片の先端部は多少の変異もあるが、前種に比べ尖る。中央孔より先は前種に比べて細長く、幅の2倍程度。側片は前種より骨化度が弱く、各片葉下面基部の隆起<→部>は、前種に比べて発達、着色が弱い(図7-a～e：生田原産、f：幌加内町産)。

体長[北海道産]：♂8.2～11.2mm(平均10.2mm/16頭)、♀7.5～11.8mm(平均10.6mm/6頭)。

※新里(2007)⁴⁾には、最大16mmとあるが、これは海外文献からの引用と思われる、少なくとも北海道産では前種を含めてもこのような大型のものを見ない。16mmという数値は、*Tetropium*属一般としても、かなり大型の部類である。

検視標本：十勝支庁上士幌町幌加：1♀, 30. VII. 1980, 石田浩司採集；同 幌加3の沢：1♂, 26-28. VII. 1970, Y. Suzuki採集；網走支庁生田原町生田原：2♂1♀, 3. VIII. 1980, 小倉直樹採集；11♂2♀, 28. VII. 1995, 平山洋人採集；4♂, 30. VII. 1995, 平山洋人採集；宗谷支庁中頓別町上頓別：1♀, 27. VII. 1987, 芳賀馨採集；空知支庁幌加内町北母子里：1♂, 27. VII. 1976, 蓮尾篤採集；1♀, 11. VIII. 1988, 石田浩司採集

分布：現在までに掌握した北海道内の分布は、上記データのとおり現オホーツク管内生田原、同宗谷管内上頓別、同上川(旧空知)管内幌加内町北母子里および同十勝管内上士幌町幌加付近。国外では、千島列島、サハリン、極東ロシア～シベリア西部、中国東北部、朝鮮半島。

寄主植物：海外文献上はアカエゾマツが挙げられており、北海道における採集例で、採集された樹種が確認されているのは、筆者によるアカエゾマツ(生田原)のみ。

以上、近似2種の特徴、分布について記した。

道内での分布を比較すると、ツヤナシトドマツは今のところ、十勝三股を中心とした、原生植生下か近年までそうであったと思われる地域からのみ発見されている。三国峠を北側に超えているので、同様の植生が続くことから大雪湖方面あるいは石北峠方面は潜在的には分布していそうな気がするが、現在まで記録はない。

一方、ヒゲボソトドマツの記録地は、前種に比べ人里寄りというか、少なくとも鉄道に近接していた地域であり、基本的に両種の分布の概要は重ならない。唯一データ上は両種が接するのがまだ士幌線が運行されていた頃の上士幌町幌加付近で、「幌加」とラベルされたツヤナシトドマツ標本が1♂(「高桑標本」!)とヒゲボソトドマツ1♀、それと旧幌加駅から実際にどの程度離れた場所か今となっては判りかねるが、「Horoka, Sannosawa(地図上では、3の沢は旧幌加駅より3kmほど離れている)と同一筆跡で年月日、採集者名もまったく同じ内容の書かれたラベルのツヤナシトドマツ、ヒゲボソトドマツ各1♂の2組がいわば両種の接点の標本として存在する。

かつて林業が盛んで鉄道による材の移動が頻繁に行われた頃のその動きの実態は、昆虫研究家の想像を超えるものがあるようで、幌加、生田原に加え幌加内町北母子里もかつては隣の名寄線白樺駅前には大規模な貯木場(ここがアイヌホソコバネの日本初記録地でもある)があったことは知られている。少ない資料から安易に推察すべ

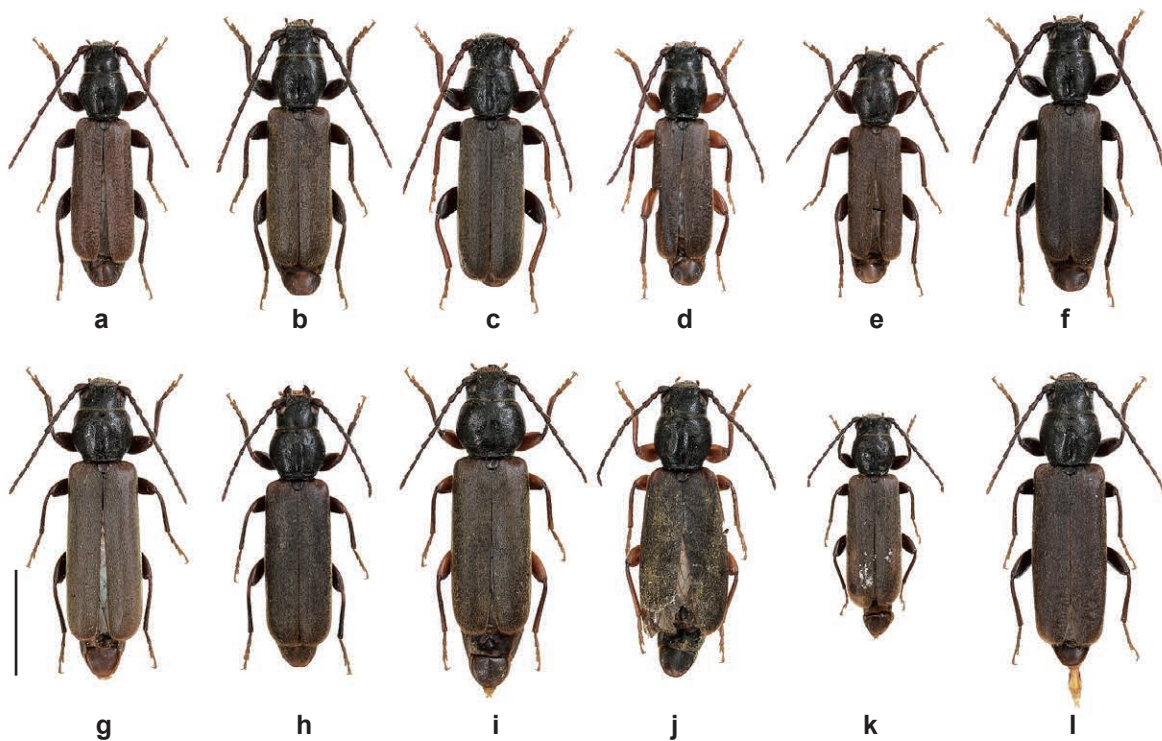


図4. ツヤナシトドマツカミキリ *Tetropium takakuwai* sp. nov. (スケール:5mm) — a: ♂, holotype, 置戸越え林道; b-l: paratypes (b, c: ♂, 置戸越え林道; d: ♂, 十勝三股; e: ♂, 上士幌町幌加3の沢; f: ♂, 三国峠上川町側; g-h: ♀, 十勝三股; i-l: ♀, 置戸越え林道) ※図4eは図5fと同一採集データラベル

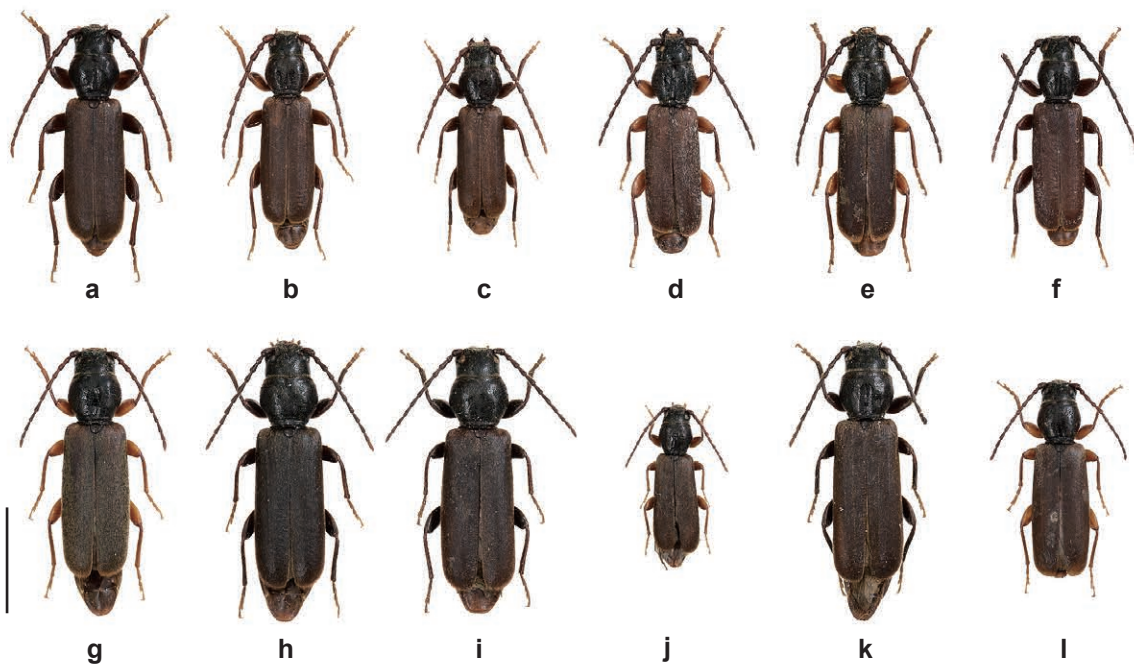


図5. ヒゲボソトドマツカミキリ *Tetropium gracilicorne* (スケール:5mm) — a-f: ♂ (a-d: 生田原; e: 幌加内町北母子里; f: 上士幌町幌加3の沢); g-l: ♀ (g-i: 生田原; j: 上士幌町幌加; k: 中頓別町上頓別; l: 幌加内町北母子里) ※図5fは図4eと同一採集データラベル

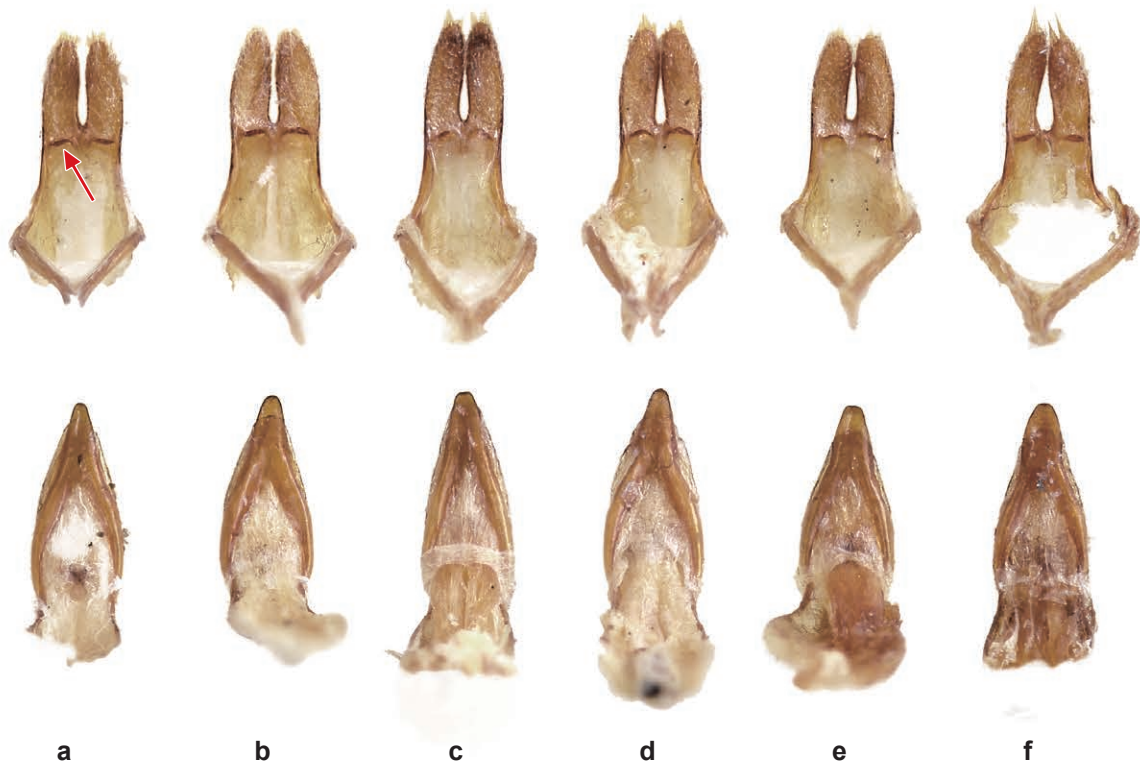


図6. ツヤナシトドマツカミキリ *Tetropium takakuwai* sp. nov. ♂交尾器 (上：側片，下：中央片) — a-d: 置戸越え林道 (a: holotype); e: 十勝三股; f: 上士幌町幌加産 (=「高桑標本」)

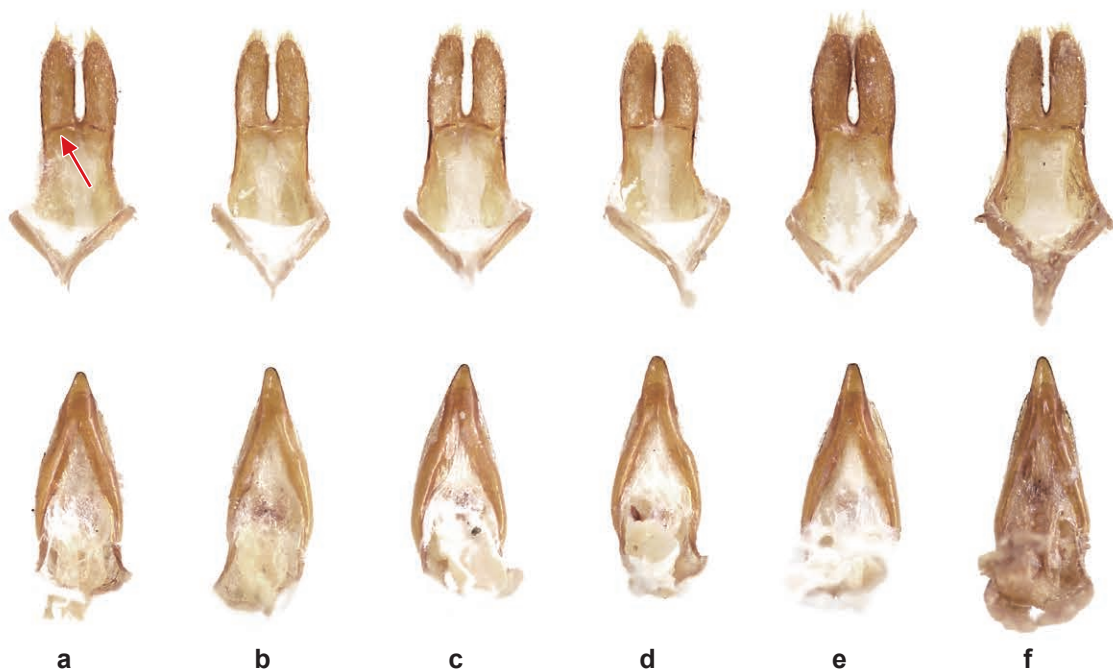


図7. ヒゲボソトドマツカミキリ *Tetropium gracilicorne* ♂交尾器 (上：側片，下：中央片) — a-e: 生田原; f: 幌加内町



図8. 2種の道内分布概念図

きではないかも知れないが、ヒゲボソトドマツの記録地がツヤナシトドマツとは対照的に、道内では地域を超えて鉄道の駅とその周辺に貯木場があった場所に集中していることは、“何か”を示唆しているようにも思える。

ところで両種のデータを通じて、ある共通点があることに気づかれただろうか？ 実は、両種とも21世紀に入ってから記録がないのである。2種の記録を合わせての、最後のものは2000年7月24日の三国峠上川町における露木繁雄氏によるツヤナシトドマツである。実はこのときは筆者も同行しており、あまりにも悔しいエピソードなので書いてしまう。

この年、旧日本鞘翅学会の大会が7月下旬に北海道大学で開催された。通常は秋開催の大会が7月となったのは、当然ながら北海道で行う以上、大会前後に参加者各自が、シーズン真っ只中の北海道各地を採集して回れるようにとの主催者側の配慮によるものである。筆者も大会後、露木氏、高桑博士を自分の車にお乗せして道内ツアーに出た。

当時、三国峠北側の林道を少し入った所に土場跡があり、1994年に秋田勝己氏と訪れた際や翌年一人で来た際も、既に材はなかったものの広場の縁部に残された針葉樹の立ち枯れや衰弱木からアラメハナ、幾らかのカタキカタビロハナ、アオヒメスギなどそこそこ良いカミキリが採れたので、まずはお二人をここへご案内した。散開して各自採集開始のしばらく後、何か気配のした1本のアカエゾマツ衰弱木の地上3～4mほどの部分をネットでつつくと、1頭のカミキリがチョロチョロと這い出した。西日を浴び

たそのカミキリは、何故か筆者の眼には一瞬、緑色に光って見えた。まだご自身でアオヒメスギを採ったことがないという露木氏に、大声で「露木さ～ん！ アオヒメスギいましたよ。どうぞ！」と呼びかけ、これは露木氏に譲ることにした。駆け寄って来た露木氏がネットでつつくとそのカミキリは地面に落下したが、ほとんど草のない裸地だったので、発見は容易であった。ただ、そこに這っていたのはアオヒメスギなどではなく、あろうことかツヤナシトドマツのみであった（一言申し添えておくと、紳士的な露木氏は「返そうか？」と言ってくださったのだが、こちらとしても先輩に一旦お譲りしたものを今さら受け取る訳にもいかなかったのである）。慌ててその木を散々調べるも、追加を得ることは叶わず、そしてこれを最後にこのカミキリは我々の前から姿を消してしまった……。

一方、1995年に筆者がヒゲボソトドマツの方を当てた生田原の貯木場であるが、4年ぶりの1999年に訪れると、以前と様子はさほど変わっていないのだが、針葉樹の材山にはトドマツカミキリ類どころかまったくカミキリがない。怪訝に思っている貯木場の作業のオジサン曰く、「兄ちゃん（この頃は、まだかううじてそう呼んでもらえる風貌だった）、虫いないだろ？」「はあ、全然……」「そうだろうなあ、ここんとこ針葉樹の方は徹底的に葉撒いてるからなあ」……という訳で、毎日搬入があり回転の速い広葉樹の材からは多少の虫が採れたものの、針葉樹の方はまったくのボウズとっていい結果に終わった。この生田原の貯木場も、2000年代の中頃に閉鎖され、今はないと聞く。

筆者自身は、立場上仕事が多忙になったり、さらに体調を崩して長期休職したりして、2002年以降北海道を訪れていない。だからといって、ただ手をこまねいて時を過ごしていた訳でもなかった。地元北海道で40年以上やっているベテランのカミキリ屋さん数名、月単位で夏の北海道へ入る複数の標本商の方々、それにたまたま単身赴任で北海道へ飛ばされることになった（本人は喜んでいたようだが）T氏などに、ツヤナシトドマツ類が実はこうなっているということを説明して、何とか追加採集をと依頼し続けていた。動機、目的は様々なれど、こと採集力に関してははいずれも一騎当千の強者である。しかも *Necydalis* やオオトラなどと違い、*Tetropium* など技術は必要なく、要は「居れば採れる」虫である。しかし、彼らの腕と勘をもってしても、ツヤナシトドマツ、ヒゲボ

ソトドマツともまったく網にかかってこない。2, 3度「ツヤナシトドマツが採れた」という噂も耳に入ったが、採集者をお願いして標本を同定させてもらおうと、ことごとくトドマツカミキリの変異だった。

実は近年の北海道は、国内では北海道にしかないカミキリの衰退が、種類によっては著しい。クワヤマトラカミキリは1990年代を最後にまったく採集例を聞かないし、ムネモンチャイロトラカミキリも同様かと思っていたら、こちらは2012～2013年頃、某所で小規模な伐採が行われた際に僅かに採れたそうなので、まだかろうじているらしいが。そのほかホソトドマツやアオヒメスギもいそうな木を見つけても以前のように安直には採れず、あれだけ群れ飛んでいたカタキカタビロハナさえ年によっては年に数頭という有様だという。北海道の華・アイヌホソコバナも発生木の減少で、近年の採集数は激減している。大規模な伐採が終わってしまったことは大きな原因の一つであろうが、それだけでは一概に説明できないものもある。温暖化のせいで片付け人もいるが、それ以外にも何か生態系全体に大きな変化が起きているのかも知れない。せつかく発表してみても、この2種の *Tetropium* に再会できる日は果たして来るのだろうか……。

***Tetropium takakuwai* sp. nov.** (Figs. 1, 4, 6)

Tetropium fuscum: Kusama & Takakuwa, 1984, *Longic. Beetl. Japan Col.*: 149, pl. 4, fig. 26 (Horoka, Hokkaido) (nec Fabricius, 1787)

Tetropium gracilicorne: Niisato, 2001, *Tôkai-Kouchu-shi*: 334 (Hokkaido) (nec Reitter, 1889)

This new species is similar to *T. gracilicorne* Reitter, 1889 from Hokkaido, but is different from the latter in the external and genital characteristics as follows: body larger and slightly more slender; pronotum shiny, widest at behind of middle, median area formed vertical line without puncture, around area densely covered with small punctures; scutellum trapezoidal, not shiny, densely covered with punctures; elytra brown, surface densely covered with gray pubescence, looking almost greenish gray; legs blackish brown, rarely red or dark red.

Male genitalia (Fig. 6a-f). Length of median lobe from median foramen to apex shorter than twice the length of width, apex slightly rounded; lateral lobes more strongly chitinized, the ridge at ventral base of each lobe strongly raised and darker.

Length: ♂ 9.0 ~ 12.5mm, ♀ 9.8 ~ 13.0mm.

Type series. Holotype: ♂, Oketogoe-rindô, Kamishihoro-chô, Tokachi-shichô, Hokkaidô, 26. VII. 1989, Hiroto Hirayama leg. Paratypes: 1 ♀, same data as the holotype; 1 ♂, same locality as the holotype, 27. VII. 1989, Hiroto Hirayama leg.; 2 ♂, do., 25. VII. 1989, Atsushi Satô leg.; 1 ♀, do., 27. VII. 1989, Atsushi Satô leg.; 1 ♂, do., 16. VII. 1995, Kôji Ishida leg.; 2 ♂, do., 22. VII. 1995, Kôji Ishida leg.; 2 ♀, do. 6. VIII. 1995, Kôji Ishida leg.; 1 ♂ 1 ♀, Oketogoe-rindô, Oketo-chô, Abashiri-shichô, Hokkaidô, 29. VI. 1995, Shin-ichi Tanaka leg.; 3 ♀, do., 7. VIII.

1995, Yutaka Sugawara leg.; 1 ♂, do., 14. VIII. 1995, Yutaka Sugawara leg.; 1 ♀, Tokachimitsumata, Kamishihoro-chô, Tokachi-shichô, Hokkaidô, 13. VII. 1981, K. Oidaira leg.; 1 ♂, do., 24. VII. 1981, Keiichi Sasaki leg.; 1 ♀, do., 19. VII. 1999, Hiroto Hirayama leg.; 1 ♂, Horokasannosawa, Kamishihoro-chô, Tokachi-shichô, Hokkaidô, 26-28. VII. 1970, Y. Suzuki leg.; 1 ♂, Pass Mikuni, Kamikawa-chô, Kamikawa-shichô, Hokkaidô, 23. VII. 1994, Katsumi Akita leg.; 1 ♂, do., 24. VII. 2000, Shigeo Tsuyuki leg.

Distribution. Hokkaidô (Tokachimitsumata and surrounding area)

Type depository. The holotype of this new species is deposited in the collection of the Department of Zoology, National Museum of Nature and Science, Tsukuba (MNST).

This new species is named after the late Dr. Masatoshi Takakuwa of Japan.

本報文の作成にあたり、大林延夫博士には日頃からの親切・丁寧なご指導に加え、Danilevsky博士への仲介の労をお取りいただくなど多大なご援助をいただいた。また、M. L. Danilevsky博士および露木繁雄、森島直哉、佐藤敦、石田浩司、佐々木恵一、菅原豊、秋田勝己の各氏（順不同）には、貴重な標本の提供、貸与などでご協力をいただき感謝に堪えない。

最後に、本来ならもっとも感謝しなければならない故・高桑正敏博士のご存命中に本報文を間に合わせる事ができなかった筆者の不徳を、天国の同博士に深くお詫びしたい。

○引用文献

- 1) 草間慶一・高桑正敏, 1984. (日本鞘翅目学会編)「日本産カミキリ大図鑑」: 149, pl. 4. 講談社, 東京.
- 2) 新里達也, 1992. (小島圭三・佐藤正孝・大林延夫編)「日本産カミキリムシ検索図説」: 86, 422. 東海大学出版会, 東京.
- 3) 新里達也, 2001. 日本産トドマツカミキリ属の再検討. 東海甲虫誌: 325-339. 穂積俊文博士記念論文集発行事業会, 豊橋.
- 4) 新里達也, 2007. (大林延夫・新里達也編)「日本産カミキリムシ」: 219, 350. 東海大学出版会, 秦野.
- 5) 新里達也・綿貫修太郎・秋田勝己, 2012. 北海道東部のカラマツ造林地に侵入したカラマツカミキリ. 森林防疫 (688): 29-36.
- 6) 芳賀 馨, 1989. 宗谷支庁・天北線沿線で採集した甲虫について. *jezoensis* (16): 103-121.
- 7) Cherepanov, A. I., 1979. *Cerambycidae of Northern Asia* (1): 598-615. Nauka, Novosibirsk.
- 8) Danilevsky, M. L., 2014. *Longicorn beetles (Coleoptera, Cerambycidae) of Russia and adjacent counties. Part 1.* 518pp. M.: HSC.

(〒183-0006 府中市緑町2-33-5-309)